

特別支援学校における医療的ケア
－ 看護師と教員の協働関係の変容 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
山本 裕子

近年、特別支援学校において医療的ケアを必要とする児童生徒（以下、児童生徒）の数が増加している。児童生徒が学校において、安全に安心して教育が受けられることを目標に、看護師や教員や保護者や主治医等との適切な連携が求められる。

本研究では、特別支援学校で医療的ケアに関わる看護師と教員の役割を明確にし、双方の協働関係の変容を明らかにすることを目的とした。2015年1月から7月まで特別支援学校で働く看護師4名と児童生徒の担任あるいは担任経験のある教員3名を対象に、半構造化面接を実施した。双方に対して、戸惑いや悩み、やりがい、役割、協働等について語ってもらった。分析は看護師と教員に分けて、KJ法を参考としたインタビュー逐語録に基づいて帰納的分析を実施し、構造化を図った。

分析の結果は、大項目の数は看護師と教員では4つ、中項目は看護師が23で教員が18、小項目は看護師が42で教員が34であった。看護師と教員の【役割】は五つに分類された。看護師は、児童生徒や教員や保護者や主治医や看護師同士に対してであった。教員は、児童生徒や看護師や保護者や教員同士や福祉サービス機関に対してであった。協働関係の構築は、【戸惑いや悩み】と【やりがい】を踏まえて、互いが歩み寄るための心得が明らかになった。具体的には、看護師にとっては《学校は治療の場ではなく、教育の場を踏まえた医療的ケアの対応》、教員にとっては《お互いの立場で意見が言える仲間として看護師を捉えている》であった。【協働】については、看護師と教員の情報共有が最も重要な点として明らかになり、これらの連携について考察した。